

RED

校 長 武井 正明

昨日夜テレビで、ちゃんみな番組を偶然見た。すっかり釘付けになった。

彼女は日本人の父親と韓国人の母親を持つ。

彼女が 11 歳の頃、飲食店を切り盛りしていた母親に、サラリーマンの酔客 2 人が「死ね」「今すぐ帰れ国へ」と理不尽な怒鳴り声を上げ、灰皿を投げつけた。なのに、それに対して母親は彼らにひたすら頭を下げる。彼女はその、あまりに辛い出来事を歌にしたが、ずっと歌えなかった。時が経ち、やがてそれをモチーフにした一曲を発表する。

それが「RED」だ。

改めてその歌詞を読んでみた。今の若い世代が共鳴する一端を見た気がした。この歌詞には嘘がない。物凄い彼女の叫び声が直接問いかけ、私の胸に突き刺さってくるようだ。

すごいな、ちゃんみな…。この人はなんと 26 歳。この若さでこんなに社会と向き合っている人がいるんだと驚いた。彼女は、とても丁寧で正しい言葉遣いで「今の社会は一言でいえば『無責任』だと思います」と言い切った。また彼女に感銘を受けたエッセイストは「今の社会は『多様性』という言葉で、「その代わり…」と相手に総ての責任を押し付ける息苦しさがある」と語っていた。

私が最も共鳴したのは、ちゃんみな次の言葉だ。

「今、あの時のサラリーマンが私の目の前に来たら、私は許せます。子どもたちにとって彼らも、いい父親かもしれない。大切な存在かもしれないから…」と語っていた。

私も同感だ。私たちは日々、いろんな人達との出会いや人間関係の中で毎日を暮らしている。その毎日で、心地よい良好な人間関係を結べる時もあれば、思い出したくないくらい嫌な思いをさせられた人を思い浮かべる人も多くいるだろう。

ただ、考えたいのだ。そんな憎しみの対象となっているその人でさえも、彼を頼りにしている家族がいる。掛け替えのない人となっている、彼に近い人がいる、ということ。

そしてこの曲は次のように締められている。

君の血も君の血も RED マジで何してんの現在（ここ）で
愛してるよみんなサランへ（サランへ…韓国語で「愛してる」）
I love you I love you I love you

「私はこんなにつらかったけど、これをちゃんと乗り越えたし、私はそれでも人のことを愛したい」（ちゃんみな談）

ちゃんみな…これからも注目していきたい。

（敬称略）